

近所に小さな漁港があり、ときどき夕食のおかず目当てに、釣りに出かけることがある。

ある夏の日、いつものように小アジ狙いのサビキ釣りの準備をしていると、いくらか距離をはさんだその場所に、人のよさそうな小柄な老人が腰を下ろし、軽く会釈をした。

僕も一応の礼儀として会釈を返したが、それっきりとくに何か話しかけてくるでもなく、老人は防波堤の上であぐらをかき、目を細めて光の網が揺れる海面を見つめていた。

どことなく亡き祖父の面影を宿したその老人を横目に、さっそくサビキ釣りを始めたのだが、その日は十五分経つてもまったく食いがなかった。そして次第に集中力を切らし、見るともなく老人の容姿を横目でうかがった。

色あせたハンチングに、くたびれたシャツ、ズボンのひざが光り、スニーカーの底がすり減っている。布袋様めいた丸顔に、うつすらと蓄えられたぶしようにひげ。ポケットから伸びる白いイヤホンが、耳たぶの大きな両耳をふさいでいる。

「何を聴かれてるんですか？」

ふと気になって声をかけてみると、老人はちらりとこちらを向いて、「こ詠歌です。お経の」と、いくらかはにかんで言った。

そこから老人は、言葉を選ぶようにして、自身の境遇を話し始めた。

長らく港湾関係の仕事をしていたが、今度の震災ですべてが駄目になってしまったこと。知り合いのつてを頼り、息子夫婦が漁協で手伝いをしていること。ときどき海に來ては、ふるさとの地に鎮魂のお経を上げていること。

僕はその話を聞きながら、大人になってから気づかされた、祖父に関する不思議なできごとを、ふと思い返していた。

満州、台湾、南方と、祖父は八年あまりの歳月を国に捧げ、晩年は杖に頼ることも少なくなかった。会うのは盆と正月ぐらいで、僕が物心ついたころにはすでにベッドに臥せっていることが多く、その声にも晩秋のかげりをまとわせていた。

母の話によると、祖父は戦地での経験をほとんど話さなかったらしい。話しても、台湾の山岳地帯で目にした色鮮やかな民族衣装の思い出や、南方のジャングルに実る珍しい果物のことに終始していたらしい。

叩き上げで准尉になるまでに、いったいどのような光景を見てきたのか、祖父の口をつぐませる理由は何であったのか、当時の資料に頼らなくても、いまならそれなりに想像することができる。金鵝勲章を祝うちょうちん行列の明かりを、どのようなまなざしで若き祖父は見ていたのか。

生前祖父は、ただ一度だけ金庫にしまわれていたいくつかの勲章を見せてくれた。そのとき僕は、勲章を彩る宝石の輝きよりも、祖父の目の奥に居座るほの暗い影の

ほうに、心を奪われていた。それが戦争によってもたらされた悲しみか悔悟か、もちろん六歳の僕には知りようもなかったが。

そして僕は、翌年にももらったお年玉袋の中に、「空」の文字が隠されていたことを、祖父の死後、何年も経ってからはじめて気づかされた。

袋のおもてには、筆ペンの文字で僕の名前が記され、その裏に「S58 空」と、いくらかゆがんだ筆跡で残されている。

もちろんそれが、昭和五十八年を意味することはすぐにわかったが、「空」の意図が、そのころの僕には見当もつかなかった。

僕の名前や、あだ名であるわけでもなく、当然ながらお年玉袋は、「からっぽ」ではなかった。

「おそらく祖父が残した『空』の文字は、般若心経に出てくる『クウ』だったと思うんです。色即是空の、『クウ』だと」

淡い夕暮れの色に染まる空気のなか、僕はたたんだ釣竿をそばにそう話した。老人の耳からは、すでにイヤホーンがはずされている。

「すべて一切にこだわりを持たず、あるがまま、なすがままの、達観の『空』ですね」

「ええ、それがあのとときの祖父の願いであったのか、それとも自分を見つめる孫への、何らかの伝言であったのか、それはわからないんですが」

「もやい綱づなって、ご存知ですか？」

ふいに老人が言ったものだから、思わず僕は、「いえ」と答えてしまった。

「船を港につなぎとめる綱なんです、それは海と人をつないできたし、父親と息子をつないでもきた。そしてあなたにとつては、戦地で苦労された若かりしおじいさんと、その勲章を見ることになった、幼き日のあなたとをつないできた」

「なんだかDNAのらせんみたいですね」

「ええ、そしてこうして、少し前までは赤の他人だった私たちをも、こうして結び合わせてくれる。過去から未来へとつながった、途切れない空の下で」

老人はそこまで話すと、かたわらの小石をひよいと海に投げ入れた。

その波紋はすぐに、光の網揺れる海面にかき消されてしまったが、防波堤で会釈を交わすだけの、老人と僕とのゆるやかなつながりは、今でも続いている。

九十九里の海と空を、新たななふるさとするであろう、二人のお孫さんをまじえて。